

<b>Title</b>	巻頭言 日本を真に元気にする施策とは：大器晩成時代を迎えて
<b>Author(s)</b>	阿久戸，光晴
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.49, 2011.1：3-5
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2946">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2946</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 巻頭言 日本を真に元気にする施策とは

——大器晩成時代を迎えて——

聖学院大学総合研究所副所長  
聖学院大学学長  
阿久戸 光晴

先日、大学責任者の集まるある会合で、政府高官が「日本を元気にする施策」と題して、国費をかけたエリート育成、日本の大学生のうちLD「Learning Disabilities」が四パーセント超という現状を近隣アジア諸国並みに一パーセント台に抑え込むこと等を発題された。とくにエリート育成の話題では、日本が現在世界に通用する数少ない例としてWBC (World Baseball Classic) で二度優勝したプロ野球を挙げられ、イチロー選手や松坂投手のような世界に通用するエリートを大学は育成すべきであり、国家はそれを支援すると述べられた。また続いて立たれた経済団体の指導者の一人が、「日本の大卒者の人間形成の成熟度、基礎知識、教養、実務能力、人間関係力等の驚くべき低さ」を訴えられ、いずれもそれらは高等教育機関の奮起にかかっていると指摘された。またこのままでは、産業界は留学生の雇用に大幅に踏み切らざるを得ず、それは一つの国難であるとして警告された。私は挙手して次のように意見を述べた。

政府高官に対しては、第二回WBCではイチロー選手は決勝戦まで不調であったはずであり、それを控え選手らが懸命に激励したことが実を結んだはずであり、また松坂選手も謙虚な態度に終始し、他の選手の活躍を指摘していたことを述べた。すなわち、日本のチームの強さは協力体制をしつかり維持できる時にこそ発揮されるのであって、どの分野であれ少数エリートを育てることに政策が偏るべきでないことを指摘した。次にLDの率を下げるものが使命であるというのは理解できない。なぜならばLDの比率はいわば公表の「正直さ」の比率である可能性が高く、ありのままの人間の現実と向き合うことが大切であって、いわゆるLDという「Challenge」は人間存在の大なり小なり与えられている課題ではないだろうか、と指摘した。そして「日本を元気に『する』施策」ではなく、「結果として日本に住むすべての人々が元気に『なる』施策」こそ、急務ではないかと述べた。「結果として元気になる」とは、人間としての尊厳が立てられ、生きる力がみなぎることを意味する。

経済界の代表者のお一人に対しては、若者に対する敬意を、より払ってほしいと述べ、日本人の平均寿命の延長がその成熟曲線をなだらかにしていることを洞察すべきである。それは、私たちがいわば大器晩成時代へ入ってきていることを確認すべきこと、それは人間の成熟を忍耐と愛情をもつて待つべきことを要求する。各産業界がその待つことに耐えられないほど経済的余裕がないかもしれないことは理解するものの、我々の世代が大卒時代に成熟度においてすでに「完成」していたならばともかく、「促成栽培」を蛮行してしまうならば、それは人間性の破壊になりかねないと述べた。

お二人からは明確な反論がなく、会議終了後感謝された。その態度には一応恐縮したが、日本の危機はむしろこのような考え方が支配的になっていくことであると感じた次第である。これから大変な時代へ入っていくと予感される。それは経済的困難でも、雇用問題における至難さでもなく、困難に

対処する精神の問題である。それは分かち合うこと、助け合うことにおいて発揮される「成熟」した精神ではなく、国際競争に勝利するためと称して「落伍」者を見捨てていく切り捨て社会への順応という「未熟」な精神の深刻な問題である。それが日本の指導層を支配しつつある。当研究所はこうした日本の精神の根本問題と取り組んでいきたい。